

# ミュージアム・レター

Gakushuin University  
Museum of History

# Museum Letter No.5

発行日 ● 平成19年(2007)9月15日

もくじ

ごあいさつ .....	1
内容豊かな「旧制学習院歴史地理標本室移管資料」 .....	1
辻邦生「スケッチブック」について .....	2
「牛車」乗車体験記 .....	3
『太平記』の〈乗り物〉 .....	4
お知らせ .....	4

## 2007年度 学習院大学史料館 常設展 「ヒトと乗りもの」

会 期：2007年9月25日(火)～11月30日(金)  
 開室時間：平日12:00～17:00、土曜日10:00～12:00  
 ＊日曜日・祝日・10月17日(水)は閉室  
 特別開室日：10月8日(月・祝) 12:00～17:00  
 10月27日(土) 10:00～17:00  
 会 場：学習院大学史料館展示室(北2号館1階)  
 入場無料

## 1. ごあいさつ

現在、学習院大学史料館では、平成19年度常設展覧会「ヒトと乗りもの」を開催しております。当館の多様な収蔵史料から、創造・発明の歴史である人と乗りものとの関係を考えてみようという展覧会です。また、このテーマのもと、当館ゆかりの本学教員の史料もあわせてご紹介いたします。

本ミュージアム・レター第5号では、この常設展覧会の内容をより豊かにする関連記事を掲載いたしました。本レターを通じて、当館の展示や活動を身近に感じていただければ幸いです。  
(館長 神田龍身)

## 2. 内容豊かな 「旧制学習院歴史地理標本室移管資料」

学習院大学史料館の収蔵史料の中でも、とりわけバラエティーに富んだ内容を有しているのが「旧制学習院歴史地理標本室移管資料」です。これは旧制学習院中・高等科の歴史地理標本室に収蔵されていた教育用の資料で、発掘調査による出土資料、アイヌや南方などの民族資料、陶磁器などの工芸資料、島津製作所の標本類などがあります。

たくさんある資料の中でもひととき美しく、私たちの目を引くのが「唐三彩馬俑」です。俑は墓に副葬する人や動物をかたどった木製・土製・金属製の人形で、唐三彩は唐代に焼かれた軟質陶器で彩色されたものです。

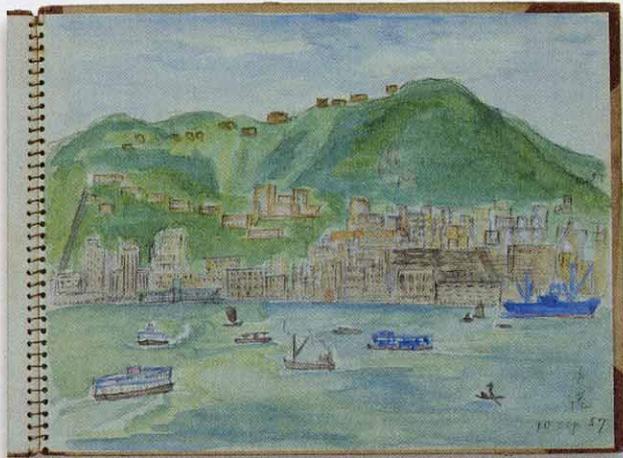
「唐三彩馬俑」の出土地は不明で、大正13年(1924)に75円で購入されたという記録が残るのみです。白米の小売価格が一升約44銭の当時、相当高価なこの資料を購入したのはなぜなのでしょう。入手経緯の記録がないため、もはや真実はわかりませんが、馬俑の優美な姿が、当時の学生たちの考古学への興味や雄大な大陸とそこを駆ける馬への憧れをかきたてると考えたからではないでしょうか。

長い年月を経て、「唐三彩馬俑」は今も私たちの前にたたずみ、教育への情熱と歴史の重さを伝えていきます。

(野尻泰弘)



▲唐三彩馬俑(「旧制学習院歴史地理標本室移管資料」史料番号287)

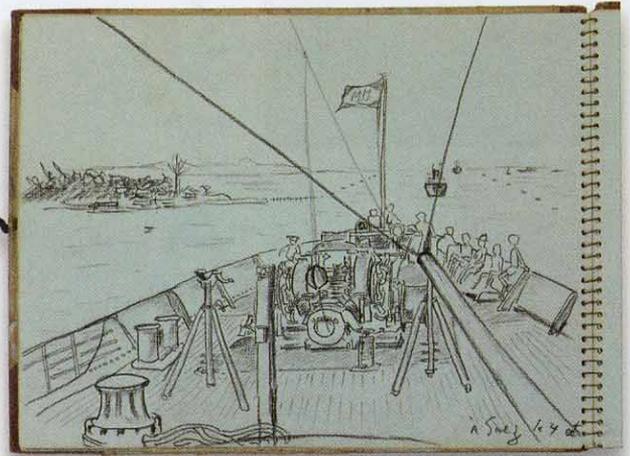


### 9月10日 香港

「海の色は、緑灰色で、遠くが一線を区切って濃い紺になり、  
白い波がキラキラと一面に光っている」  
（『パリの手記Ⅰ 海そして変容』河出書房新社、1973年7月15日）

### 10月4日 スエズ

「11時再び錨が上がり、船は動きはじめる。スエズ運河を眺める  
人で甲板は鈴なりの盛況だ」  
（同左）



## 3. 辻邦生「スケッチブック」について

学習院大学史料館では、作家 辻 邦生氏の資料を収蔵しています。『西行花伝』『背教者ユリアヌス』などの歴史小説や、朝日新聞での連載小説『雲の宴』で知られる辻氏は、文学部教授としての15年間を含め約35年もの間、学習院大学で教鞭を執っていました。当館では、辻氏の生前から執筆活動に関わる資料の寄託を受け、整理、保存しています。

ここに紹介するのは、辻氏が初めてフランスへ渡った時に携えたスケッチブックです。1957年9月4日横浜港を出航してから10月9日フランスへ到着するまでの寄港地の様子や、パリ到着後に訪れたシャルトル大聖堂・オペラ座通りなどが精密に描かれています。

公務員の初任給が約1万円だったこの時代、渡航運賃だけで30万円近い費用がかかるフランス留学は、決して簡単なことではありませんでした。しかしながら辻氏は、フランスへ留学しなければフランス文学を学ぶ資格はないという大学研究室の雰囲気の中で、真剣に留学を志してゆきます。当時のことは後年このように書かれています。

「研究室にいても、フランスで研究するのじゃなければフランス文学とはいえない、というようなイキのいい議論が学生たちの間で幅をきかせていた。フランスにゆくのはなんと

なく夢物語のような気がしていたのに、急に現実の問題となり、みんなも留学生になるのがフランス文学をやることだと考えるようになった。」（辻邦生著『のちの思いに』新潮社、1999年12月7日）

そして1957年7月、ついに辻氏はフランス保護留学生の資格を得て、念願のフランス留学を果たします。渡仏に際しては、生来の冒険心とロマンティズムから、あえて飛行機ではなく1ヶ月間の船旅を選び、フランス郵船カンボージュ号でフランスを目指しました。それも、留学生が一般的に利用する三等ではなく、季節労働者が大部分を占める四等船客(デッキ・パッセンジャー)になることを選択します。四等船室での旅は、風変わりな人物との出会いや様々な経験を辻氏にもたらしめます。横浜港を出航する時には20人にすぎなかったデッキ・パッセンジャーは、寄港のたびに増え続け、3週間後コロンボに着く頃には200人もの数になっていたそうです。

なお、一緒にフランスへ留学することになる佐保子夫人が飛行機でフランスに向かったのは、横浜港で辻氏を見送った1ヶ月半後のことであり、辻氏が過ごした33日間の船旅に対して、所要時間はたったの2日間でした。

（生田享子）

## 4. 「牛車」乗車体験記

牛車をご存知だろうか。前近代に牛に引かせた貴族の乗りものであり、平安時代に最も多く用いられた。その牛車も、現在では、葵祭や神社の祭礼などのごく限られた機会にしか姿を目にすることは出来ない。

今年5月、葵祭を間近に控えた京都を訪れ、宮内庁京都事務所の協力の下、葵祭に使用される牛車2台のうちの1台(八葉車)に試乗する機会に恵まれた。そこで、古代・中世の人々が、牛車に乗りながら何を感じたか。私なりのささやかな体験をお伝えできればと思う。

間近に見る牛車は思いのほか大きい。車輪はゆうに2メートルはあろう。箱(牛車本体)の高さも大人の肩近くはある。したがって、牛車に乗り込む際には、「棧」と呼ばれる梯子を箱の縁に付けて上らなければならない。箱の内部は畳3帖ほどの広さで、天井までの高さは1.9メートル、左右の壁面は、花や鳥などを描き込んだ四季おりおりの風景画で飾られている。壁面には、物見(左右に開く窓)も付けられており、外の景色が眺められるようになっている。

少しの距離を人力で牽引していただいた。開いた窓からは、車輪に打たれた金物が回る様がよく見える。そして、車輪の回転に伴い、キーキーという独特な摩擦音があたりに響く。平安の都は、日夜このような牛車の音に満ちていたのだろうか。ゆるやかな時の流れに身をゆだねながら、しばし、当時にタイムスリップしたような感覚にとらわれた。

西洋文明の波が押し寄せる明治に至るまで、日本には何故、よりスピードのでる馬車が出現しなかったのか。その理由はいろいろと考えられよう。ただ、私には、貴族達が欲していたものが、牛車に乗った時に感じられた車輪の回転や音に象徴される「ゆるやかな時の流れ」であったのではないかと考えてならない。

(徳仁親王)



牛車(八葉車)に乗って - 右は同じく客員研究員の木村真美子氏



「杏葉車」全景



「八葉車」の内部



## 5. 『太平記』の〈乗り物〉

大学史料館では、常設展「ヒトと乗りもの」を開催いたしますので、今回はそれに因んだ話題を提供しましょう。文学テキストにみる「乗り物」の問題です。例えば、南北朝の動乱を語る『太平記』という軍記物語がありますが、それは後醍醐帝の内裏からの逃走劇で始まります。帝は「女房車」で出奔、<sup>はりごし</sup>「張輿」に乗換えて笠置山入りし、さらに山からは「田夫野人」の姿で「裸足」で逃走。六波羅に捕まるも、今度は帝に相応しい待遇として<sup>ほうれん</sup>「鳳輦」<sup>こんりょう ぎょい</sup>「袞龍の御衣」を幕府に要求。隠岐島脱出の際も、「女輿」に便乗し、そして「泥土」のうえを「裸足」で疾駆、さらに野人に背負われ、「船底」に隠れたりして伯耆国船上山にたどりつく。吉野入りではまたも「女装」、そして「馬」、さらに「張輿」……。

『太平記』の行文は、このように後醍醐が移動するごとに、その衣装や乗りもののチェンジの有り様に執拗に拘り続けます。内裏の奥深く鎮座する、不可視にして不動の天皇像とは正反対のものがここにあります。ここでは白日のもとに曝された天皇の身体こそが問題とされていますが、それは逃げ惑う敗者としての姿ではなく、異様な力を秘めた異形なるものとして位置づけられています。まず「衣装」とともに「乗り物」が天皇の身体を象るモチーフとしてある点に注意しましょう。そしてもう一つは、その凄まじいばかりの変幻自在な有り様です。このように縦横無尽に変身する後醍醐の身体により、一挙に社会全体が革命の混乱状況にたちいたったとするのが『太平記』の方法であります。因みに、後醍醐の逃走と向き合うように、北朝光厳院の全国行脚の場面を最後にすえて『太平記』は語りおさめられています。「乗りもの」、それは「交通論」「逃亡論」「身体論」「変身論」「変装論」「祝祭論」「天皇論」等への可能性を秘めた、今もとても注目されている研究対象なのであります。

(館長 神田龍身)



鳳輦(『故実叢書 輿車圖考付圖 甲帖』(1900年発行)より転載)

## 6. 催し物のお知らせ

### 第54回 史料館講座 「歌舞伎の世界 — 伝統と創造 —」

講師：京都造形芸術大学教授 田口章子氏  
日時：11月15日(木) 18:30~20:00  
会場：学習院創立百周年記念会館1階正堂

\* 入場無料・事前申し込み不要です

ミュージアム・レター第5号

2007年9月15日発行

〒171-8588

東京都豊島区目白1-5-1

電話 03 (3986) 0221

内線 6569

FAX 03 (5992) 9219

Gakushuin University Museum of History

学習院大学史料館

● ホームページもご覧ください

<http://www.gakushuin.ac.jp/univ/ua>